

生活第一 芸術第二

— 文藝春秋を創設した菊池寛 —

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

作家として大成した菊池寛(1888-1948)は、きわめて有能な実業家でもあった。低価格で質の高い文藝春秋を私費で創刊し、一気に売り上げを伸ばして出版界の寵児となる。現在も何かと話題の多い芥川賞と直木賞を創設したのも菊池だった。映画制作にも携わり、大映の初代社長として時代劇の黄金時代を築いた。

苦勞人で人情家で人間通の菊池は大衆文学で稼いで純文学を支え、才能がありながら売れない新進作家たちを援助した。その一方で戦時中に文芸銃後運動を主導し、軍部の翼賛体制に加担するなど文学者としての戦争責任に無自覚だった。

清濁あわせもつ商人として菊池は文学を道楽や芸術や思想の領域から解き放ち巨大なビジネスの沃野に変えた。いわば商品としての文学を提供することによって文学の歴史を塗りかえたといっても過言ではない。

親身になってくれる兄貴

菊池は香川県高松市で没落した元士族の家庭に生まれた。本名は寛。教科書が買えず友だちから借りて写本するほど生活は貧しかった。

それでも勉学に励み旧制高松中学から学費免除の東京高等師範学校に進学する。しかし出席不足で除籍処分となり、窮地に陥ったとき菊池の将来を見込んだ地元の資産家が経済的支援を申し出た。

明治大学、早稲田大学を経て念願の第一高等学校に合格する。

同級生の芥川龍之介と親友になって共に文学の道を志すものの、窃盗の容疑をかけられた友人の身代わりになって卒業間際に退学する。こうした菊池の人間性

について芥川は「今日までたびたび自分は自分よりも自分の身になって菊池に自分の問題を考えてもらった。それほど自分に兄貴らしい心もちを起こさせる人間はいまのところ天下に菊池寛のほかは一人もいない」と頼りがいのある兄を慕う弟のように記している。

ふたたび裕福な友人一家に助けられ京都帝国大学文学部英文科に入学した菊池は芥川らと同人誌「新思潮」を創刊し、『父帰る』、『屋上の狂人』などの戯曲を発表した。芥川の短編小説『鼻』は夏目漱石から激賞されて一足先に文壇に躍り出た。

戯曲から小説に転じた菊池は大学卒業後、時事新報社会部記者を務めながら『忠直卿行状記』や『恩讐の彼方に』を書き上げた。これが大評判に



菊池寛

なり、記者を辞めて作家生活に入る。大正9年(1920)から毎日新聞で連載を開始した大衆小説『真珠夫人』が舞台化されるほど爆発的な反響を呼び、一挙に流行作家の仲間入りをした。

人生は一局の将棋なり

生活に余裕ができた菊池は大正12年(1923)1月に月刊誌「文藝春秋」を発刊する。他の雑誌の分厚い新年号に比べ本文28ページと薄く片手で丸めることができた。しかし執筆者は芥川龍之介、川端康成、今東光ら錚々たる顔ぶれで4段組の紙面に活字がぎっしりと詰まっていた。

値段もうどん一杯分の10銭で文芸誌としては破格の安さだった。発行所は東京都小石川区林町19番地の文藝春秋社。実際は菊池の自宅で現在の文京区千石の住宅街で産声を上げた。

創刊号の3000部はたちまち売り切れ、その後も順調に部数を伸ばして9月号で1万部を突破。4年目には11万部と記録的な売り上げをみせた。

絶頂期を迎えた菊池は昭和元年(1926)、新たに発足した日本文藝家協会の初代会長に就任する。昭和3年(1928)、社会民衆党委員長の安部磯雄に請われて第1回男子普通選挙に出馬したものの次点で落選。同年、文藝春秋を株式会社にして取締役社長の座に就いた。

昭和10年(1935)、自殺した芥川そして直木三十五の名を冠した芥川賞と直木賞を創設。文学の社会的振興を図る話題づくりに成功し、純文学と大衆文学の両分野で多くの逸材を輩出した。

私生活では麻雀、競馬、将棋に熱中した。日本麻雀聯盟の初代総裁となり、麻雀牌の輸入販売を始めるなど麻雀ブームの火つけ役となる。競馬では入門書の『日本競馬読本』を上梓し、みずからも有力な競走馬を所有した。

伝説的なエピソードを数多く残しており、生誕100年には『逸話に生きる菊池寛』という小冊子が発行された。よくハンカチを落とすので夫人が紐をつけてポケットに縫いつけたり、愛煙家なのに灰皿を使わず家中焼け焦げだらけにしたり、蟻のたかった菓子を平気で食べたりとユーモラスな奇行が山ほどある。愛人もたくさんいて映画評論家の小森和子もそのひとりだったという。

その反面、生活に困った若手や作家の家族たちを助けることも少なくなかった。「人生は一局の将棋なり 指し直す^{あなた}能わず」と語った菊池は裏表のない愚直な人柄で人々に慕われた。

わざと紙幣をくしゃくしゃに

日本の国際連盟脱退から日中戦争に至る昭和15年(1940)、菊池は文芸銃後運動を提唱する。国家の非常時に際し。文芸家も国民精神総動員に協力しようと全国各地で遊説活動を繰り広げた。文壇の大家として久米正雄、岸田国土、横光利一、林芙美子、吉川英治らも積極的にかかわった。

文芸評論家の小林秀雄は「菊池さんは物にだけ興味を持って物の見方とか物の考え方の話になると、すぐ退屈そうな顔を露骨にしてみせた」と語ったことがある。菊池が興味をもつのは戦争の事実だけで戦争の見方や考え方は眼中になかった。「生活第一 芸術第二」をモットーに高邁な理想より現実の生活を守ることを何よりも重視した。

昭和18年(1943)、菊池は映画制作配給会社が統合して新たに設立された大映の初代社長に就任する。永田ラッパの異名をもちワンマンの2代目社長となる永田雅一に担ぎ出された。就任あいさつで菊池は「おもしろくない真実より、おもしろい嘘を観客は待っている」とシナリオ中心の持論を展開し、阪東妻三郎、嵐寛寿郎、市川右太衛門、片岡千恵蔵らのスター俳優による時代劇ブームを巻き起こした。

戦後は戦争協力によって公職追放の身となり、昭和21年(1946)3月に文藝春秋を解散。同社は同年6月に社員有志によって再建され、その2年後に狭心症で59歳の短い生涯を終える。戦争責任については最後まで反省することがなかった。

生前の菊池は売れない作家たちによくポケットマネーを渡していた。文壇の大御所である永井荷風はそんな菊池の振る舞いを日記の『断腸亭日乗』で露骨に罵倒している。高等遊民の荷風にとって菊池は田舎者の無粋な成金の典型として見えたのだろう。

とはいえ菊池は自慢げに金を与えたことはない。相手が気を遣わないように、わざと紙幣をくしゃくしゃにして無雑作に握らせた。